

## 利根大堰周辺の治水と環境検討会現地確認会 実施概要及び意見要旨

■日時：2022年5月30日（月）14:00～16:45

■場所：利根大堰上下流左岸域

■参加者：

<環境団体等>（五十音順）

- ・ 新井千明氏（NPO 法人熊谷の環境を考える連絡協議会・副会長）
- ・ 今村武蔵氏（NPO 法人ふるさと創生クラブ・代表）
- ・ 岩田 薫氏（全国環境保護連盟・代表）
- ・ 島田勉氏（行田ナチュラルリストネットワーク・研究部長）
- ・ 須永伊知郎コーディネーター（（公財）日本生態系協会・理事）

※橋本恭一氏（行田ナチュラルリストネットワーク・代表）は所用により欠席。

<利根川上流河川事務所>

島田副所長、佐々木調査課長、真崎調査係長

<（公財）日本生態系協会> ※検討会事務局

■主な意見・指摘事項等：

「利根大堰周辺の治水と環境検討会」対象エリアについて、NPOメンバーを対象に、前回検討会（2019年12月開催）からの現場環境の変化を確認するとともに、モニタリング調査結果などの報告を行った。

各検討対象エリアにおいて、参加者から以下のような意見・指摘事項が寄せられた。

### 1. 利根大堰下流左岸・下流域ゾーン（掘削完了エリア）

- ・ 「だるま池」周辺はヤナギがこんなに茂ってしまったことからよく解かるが、池自体は掘り方が足りなかった。年間を通じて水面があることが確認されたのは、今後の参考になる。この池も、少なくとも3倍くらいに広げてほしい。（団体）
- ・ 「掘削水路」も、ほとんど埋まってしまう掘り方が足りない。2-3倍くらいの幅が必要。せっかく国の予算を投入して行う事業なので、中途半端に行くと無駄遣いになってしまう。増水すると土砂がたまるという自然の力はやむを得ない所があるが、なるべく水が常に溜まるよう工夫してほしい。生きもの指標としては、コウノトリはアピール力があるので良い。コウノトリが飛来して餌環境として定着すれば、この場所の評価も高まる。（団体）
- ・ 熊谷市の令和3年度「環境白書」では、コウノトリのネットワークに参加して取り組んでいくことが新たに明記され、地元でも注目度があがっている。コウノトリが生息するためには、どう掘ればよいかを前提に計画を検討してもらえると良い。熊谷市内では、最近では昨年夏にもコウノトリ飛来を確認している。「掘削水路」は、水路幅が広ければ、岸沿いにヤナギが生育しても水路上を枝が多少覆うくらいなら良いが、今はヤナギに囲まれた状態で、やはり掘る幅が狭かった。（団体）

- コウノトリは行田・熊谷にもたびたび飛来している。渡良瀬遊水地であれだけ盛り上がっているコウノトリによるエコネットの取組みを、同じ事務所でやっている訳なので、利根大堰周辺についても「渡良瀬エコネット協議会」に参加する形で広げ、しっかり取り組んでほしい。(団体)
  - 前回検討会からの環境変化に今日来て見て驚いている。コロナの関係でこの間できない問題はあったが、改めてうまく進めていただきたい。この場所での湿地整備は、新しい試みとして全国的にも注目されている場所。治水予算をうまく使って環境にも配慮した湿地づくりは知恵の絞りどころだと思う。治水と環境の両立という注目される事業で、うまくいけば利根川上流におけるモデル事業になるのではないかと。(団体)
  - 出水時にある程度埋まるのは仕方ないので、なるべく湿地を長期に維持できるような計画にする必要がある。広く掘れば、植生遷移が浅いところから進行しても、中央はしばらく開放的な湿地環境が維持できると思う。(団体)
- ⇒ この場所を改めて掘ることではなく、次に掘る予定の隣接箇所で、掘削後の変化から得られる知見やモニタリング調査結果などを活かした掘削を行いたい。現状で優先的に進められている築堤事業は大堰周辺から 10km ほど下流で進められており、予算縮減の関係から土取りもその近傍から実施しているため、この場所の隣接箇所を掘削する時期は未定である。部分的な修復などであれば、小規模な維持工事の中で、できることはあるかもしれない。行田市の右岸築堤を行う際には、近くに位置するこの大堰周辺から土採りによる掘削ができると思うが、現状ではまだ下流からの実施となっている。(事務局)

## 2. 利根大堰下流左岸・中流域ゾーン（たまり池付近）

- 「たまり池」の水温は計っているのか。夏場に 25~26℃だと湧水は入っていないと思われるが、ここは 50 年前は湧水による湿地があり、水温が低く冷水性のトンボ類も生息していた。今後の掘削工事では、「たまり池」の最上流端に大きめの池を深めに掘って湧水源とすることはできないか。そうすれば、昔のように池の透明度や水面の幅も増すし、雨が少ない時期に水路・池への水の供給源になるかもしれない。(団体)
  - 利根上前任の大須賀専門官が担当していた時に、維持工事として「たまり池」の修復工事をしてもらい、我々も現地でユンボでの傾斜のつけ方など助言をした。その時には「たまり池」全体で見れば、下流側半分くらいの区間で行ったと思う。掘削した下流側も含めて積極的に湿地再生に改めて取り組むと明言されていたので、ここまで言うのかと我々もやや驚きつつ大いに期待していた。こうした経緯もあるので、引き続きぜひよろしくお願ひしたい。(団体)
  - 侵入防止対策実施後は、ほとんどオフロード車が侵入してくることは無くなったが、最近、河川の水位が下がった時に、昭和橋付近から川岸伝いに再度侵入していることを確認した。「たまり池」内部への侵入が対策後はじめて確認されが、その影響は大きい。侵入口は限られていると思うので、その場所に車止めを設置するなど、効果的な対策をお願ひしたい。(団体)
- ⇒ 次期掘削は、掘削完了エリアに隣接する上流側エリアから実施することが予定されている。「たまり池」の掘削も試掘ということで実施されたので、下流側のエリアの掘削後に順次、この付近の掘削も改めて考えていくことになる。車両の侵入ルートを改めて確認し、川俣出張所と対

策を検討したい。(事務局)

### 3. 利根大堰下流左岸・上流域ゾーン

#### 1) 砂礫河原付近

- 砂礫河原の指標となる[ ]は、毎年飛来が確認されているものの営巣には至っていない。繁殖条件から見ると、砂礫河原の面積がまだせまいことや人の出入りが影響しているのではないか。(団体)
- 大堰ゲートの操作を工夫して砂礫河原を広げられると良いが、治水上の様々な制約条件や規定などもあり現状では難しいとの説明が以前、水資源機構からあったが残念な思い。(団体)
- [ ]など、砂礫河原を利用する鳥類が毎年確認されていることや、[ ]も見つかっていることは、以前より環境が改善されているようには思う。(団体)

#### 2) 大堰直下(視察は立ち寄らず話だけ)

- 利根大堰の耐震化工事に際して、[ ]の[ ]の保全と正確なモニタリング調査の実施を申し入れた。その調査は今も継続しているのか?産卵状況はどうか?(団体)  
⇒工事による影響が懸念されていたが、モニタリング調査が継続されており、[ ]の[ ]も今春は多数確認しているとの報告を受けている。昨年度末に郵送した検討会資料にも[ ]の報告が含まれている。(事務局)
- 工事を前に、大堰直下に自生していた[ ]を自宅の庭へ一時避難させているが、貴重な地域の遺伝子であるので、利根川河川敷で何とかできないか。(団体)
- 大堰の工事の影響がまだ続くかもしれないので、下流左岸域で掘削が進み、生育に適した湿地環境が整備された段階で戻すのが良いと思われる。(事務局)

### 4. 利根大堰上流左岸(保全ゾーン)

- 千代田町が河岸部をレガッタの練習場として整備したいという話もあって、掘削を開始したところ、試掘の段階で良好な湿地が形成されてきたため、レガッタの練習場はさらに上流側を掘削することに変更し、この場所を湿地整備することになった。掘削予定エリア下流側の川岸の大木に、以前、タカ類の古巣があったため、そのエリアは当面保留し上流側を掘削することが検討会の場で確認されている。(事務局)
- 検討会では、千代田町としても、この場所をレガッタとともに良好な水辺空間がある場所としてPRしたいと考えていて、いい自然環境ができれば歓迎したいと話していた。地元の人は見慣れているかもしれないが、外からくる人にとっては素晴らしい水辺環境だと思うので、積極的に進めるべき。(団体)
- 大堰上流側は、冬場に水鳥が多数利用する場所である。希少種の[ ]の飛来数も多く、対岸の福川合流点のマコモ帯がある付近を中心に越冬個体も見られていたが、令和元年の東日本台風の後には岸辺の植生が変化し減少している。(団体)
- 湿地整備箇所は、出水による土砂堆積や植生繁茂により年々開放水面の面積が狭まってきているので、掘削が完了した湿地整備箇所についても今後の下流側掘削予定地で掘削を行う際



に掘削してもらえると良い。(団体)

- レガッタは手漕ぎなので静かだが、水上バイクはエンジン音も大きくうるさく、水鳥類に影響を与えている。(団体)

## 5. 全体のとりまとめ (コーディネーター)

- 川の中で湿地整備を進める適正地をどう評価したら良いかの検討が進んできている。「河床変動量」を物差しとする考え方があり、利根大堰下流左岸域の掘削対象エリアでも、「下流域ゾーン」の一回掘った場所付近は航空写真から見るとやや蛇行部にあたり土砂が堆積しやすい。直線部も堆積しないということではないが、湾曲傾向がある場所に比べると堆積しにくいとされており、次期掘削対象エリアの方が堆積しにくい条件下にあると思われる。
- 「下流域ゾーン」は、この検討会が再開した時にコウノトリの生息(採餌)環境を目標とした湿地整備を行うことがすでに合意されており、冬季の河川水位が下がった時期に水深10~30cm程度で餌動物が得られ易い湿地を創出することが求められている。前回掘削した「だるま池」周辺を再度掘削すべきとの意見もあるが、次の掘削予定エリアの方がやや堆積しにくいと考えられることや、「だるま池」の常時水域が確保されている観測データの活用などを踏まえると、次期掘削予定地の中で、今日現地で頂いた意見を反映し、コウノトリの採餌に適した湿地整備を進めることが良いと思う。
- 土砂堆積をなるべく遅らせて湿地を長持ちさせる対策についても、コウノトリに適した生息環境整備の課題について、同様に取組んでいる九頭竜川水系の事例では、治水上問題とならない前提で、掘削面の川際に小堤を設け、下流側だけに開口部を開けて土砂の流入を少なくする湿地構造としている。豊岡の円山川も含め、様々な知見が得られているので参考にする必要がある。
- 「中流域ゾーン」は、下流域の次に「たまり池」の水域の状況を注視しながら適切な方法で掘削していくことになるが、冬季も含めて「たまり池」全体で常時水域が確保可能となることや、湧水の存在、指標となる[ ]の安定化等が課題となる。
- 「上流域ゾーン」は、当初検討された大堰のゲート開放操作に伴うフラッシュによる砂礫河原の再生は現状では困難なので、車両侵入防止を徹底しながら砂礫性動植物の分布再生を把握していくことになる。幸い、[ ]等は繁殖していると考えられ、[ ]の確認記録も蓄積されている。これらは、車両侵入が抑止されたことの効果と言えると思う。
- ゾーンごとの大まかな目標や環境整備イメージは、検討会再開時に合意されているので、それを確認しながら、どこまで達成しているかの情報を共有しながら、次の治水工事のタイミングに応じて具体的な湿地整備の掘削計画や設計の中で、得られた意見を反映させていくことが大切である。

以上



利根大堰周辺の治水と環境検討会・現地確認会 写真票

1. 下流域ゾーン（掘削完了エリア/だるま池・掘削水路）



2. 中流域ゾーン（たまり池付近）





3. 上流域ゾーン (砂礫河原付近)



4. 大堰上流左岸域



5. まとめ (水資源機構駐車場)

